

恩師

一二三朋子

一 昨年の秋、恩師より突然電郵ありき。恩師には大學院生の時のみならず、就職に際してもことのほかお世話になりき。なれど、恩師の退職後、十年餘り、賀状のやり取りのみにて、電郵電話は全くせざりき。何事かあらむといぶかしみしかど、理由はともかく、毎月一度、電話にて對話の時間を持つことを約せり。短歌を始めたること、梅干しと糠漬けを作りをること、高千穂神社に参拝したること、浪曲を好むことなど、近況を報告せり。恩師は浪曲よりも講談を好まるとの由。神田伯山なる講談師は恩師の知己なるなり。講談について些かも知らざりけれど、何かゆかしく、電網の動畫にて視聽するや、すつかりその面白きに魅せられたり。筋の面白きもさりながら、張り扇の小氣味よき打音、滔々たる水の如き語り口。天才とはまさに此の如き者ならむと得心せられぬ。「伯山が講談に出會ひしにあらざ、講談が伯山に出會へり」とは、恩師の名言なり。

(令和五年六月二十日受附)